

教務だより

2015年4月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

目的を持って始める！

風に立つライオン

茗溪塾塾長 宇野 雅春

茗溪塾で働く先生の結婚式があり、久しぶりに原宿に行きました。昔とすっかり様変わりした表参道もさることながら、人の数のすごさに圧倒されました。外国人が多いのと、それに交じる若者達。何とも華やかで、楽しい雰囲気が充満しています。おしゃれな店と華やかで自由な思い思いのファッション、なんだか一日中こんなところにいたら、幸せ感一杯なんだろうな…と思ってしまいます。

目的もなくさまよっている楽しさというか、たださまよっているから楽しいというか、そこにしっかりと根を張るには、華やかすぎる街…。言ってみれば年寄りの行く場所じゃないってことかも…？こんな黒づくめ…「結婚式なんではないのです。」と言い訳しながら歩いている感じの僻み根性で言わせてもらうと、要するに、「みんな目的を見失っているんじゃないのか？一日ぶらぶら歩いて、いろんなこと夢見ても、現実はそのようなところにはないよ！」「余計な御世話だ！」と言い返されそうですが、春の陽気は魔物。振り回されているうちに迷子になりそう…。せめてもの救いは新しいスタートを切る二人…。

春の行楽シーズン、今年は、特に好景気感があって、遊びに行く、旅行に行くが目立ちそうです。春休みを利用しての旅行もブームらしい。就職の決まった大学生は卒業旅行に行き、新しい学校に合格した生徒たちは、「御苦労さん」の家族旅行へ…。

ここで大切なのは、「目的」を見失わないこと。次の目的地はどこ？ということ。

「風に立つライオン」が上映中です。最近見ました。ゲームを買ってもらえるはずだった少年が、喜び勇んでもらったプレゼントが開けてみたら「シュバイツァー」の伝記。多分、親としては高額なゲームを買う代わりに「ごまかした」に過ぎないことだったのだと思いますが、結局その本に触発されて医者を目指し、アフリカの医療に飛び込んでいくという話です。アフリカの内戦の地獄のような様相や子どもを取り巻く非情ともいえる状況が次々と映し出されていきます。小さい頃吃音のあった少年が、合唱コンクールでソロパートを自ら進んで志願し、その成功から明るい性格へと変わっていき、医学部受験も一度は失敗するも二回目はトップ合格をします。そしてアフリカでの過酷な日々の中に、自分の生きがいを見つけていきます。離島の医療に身をささげる日本の恋人とも、結果的に別れざるをえないのですが、人の力を超えて仕事を成し遂げていくその様子は、力強く周りの人たちをも変えていきます。「風に立つライオン」は群れから外れた孤高の存在を象徴しています。過酷な状況に潔く飛び込んでいく青年医師は非業の最期を遂げてしまうのですが、大きな仕事を残していきます。日本人看護師とともに作った孤児院施設で出会う、自暴自棄になって未来を見失っている少年たちの未来へ向けての再生、一人は医者を目指し、東日本大震災の時に医者として石巻の海岸に立つこととなります。目的を持ちそれを成し遂げていく人々の勇気と決意に胸打たれる作品になっています。人が人にできることの大きさと儂さがそこにはあります…。

これを書いているのは三月の末ですが 春四月、桜満開の日本は、陽気とともに一段と華やかな季節になることでしょう。「風に立つライオン」まででなくても自分の将来へ向けて、「目的を持って始める！」ことを心がければ、人の波に押し流されることなく、自分の一歩を歩きだせる気がします。漠然とではなく…しっかりと「目的」を見つけて歩く以外に本当の充実感はないように思います。どのレベルであれ自分のできる精一杯を全うすることが一番大切なことに思える今日この頃です。